

全校的に取り組む防災教育の導入と実践報告

高等部首席 豊島 秀多

1 はじめに…「防災教育に関する本校の現状と課題」

本校は南海トラフ地震の危険性が指摘されている地域である。しかし防災教育の必要性に対する意識が高い状態とは言い難く、ここ数年の検討事項として挙げられるものの授業実施までは至っておらず、避難訓練の実施を行う程度である。本校は知的障がいのある小学生・中学生・高校生の子どもたちが通う特別支援学校であり、子どもたちが自身の命を守る行動や助けを求める為の行動について学習するとともに、教職員自身の行動確認を行うためにも防災教育を充実させることが急がれる学校課題である。これまでの避難訓練では避難行動についての学習しか展開できていないことから、本プロジェクトでは避難後の生活についての学習も具体的に検討したい。

2 授業の概要

1) 対象

本校全児童生徒・教職員・PTA 役員及び実行委員

2) 授業名

「いくの防災デー」

3) 期間

令和3年9月3日（金）全日（他、事前と事後の準備）

3 授業のねらい

1) 授業の目標

子どもたちが自然災害について事前に確認し、一人ひとりが自身の行動について考える。

2) 指導支援の方法

子どもたちの年齢や発達段階に応じて展開できるよう、各担当者で調整を行いながら内容を検討する。そして体験的な活動を多く取り入れることで子どもたちが実感を持ち、主体的に考えることのできるよう工夫する。

4 いくの防災デーの内容構成

- ・防災学習の授業
- ・備蓄品の見学
- ・非常食を取り入れた給食の提供
- ・避難訓練

5 結果

いくの防災デー当日は、全学部で映像教材を活用した授業の実施・備蓄品の見学・非常食を取り入れた給食の提供・避難訓練の実施を行った。

1) 防災学習の授業

各学部の取組内容は次の通りである。小学部では教員出演による映像教材を作成・活用し、子どもたちが親しみを持って学ぶことのできるように学習を展開した。中学部ではバケツリレー、消火器や布担架の使用を通して体験的に学ぶことのできるように学習を展開した。高等部ではクイズを通して自身の行動について考えを深め、具体的に学ぶことのできるように学習を展開した。それぞれの教員が自身の担当する子どもの発達段階を考え、スムーズに学習できるよう工夫する姿、教員自身の災害体験を子どもたちに語る姿などが見られた。実践中である教員は「防災デーの取組を通して、日々の授業の中でも防災学習を位置づけることが大切なのではないか」と語り、防災教育への意識の高まりがうかがえた。



2) 備蓄品の見学

本校には4ヶ所の備蓄品倉庫があり、それぞれに保管している備蓄品を体育館に集め、展示を行った。備蓄品は倉庫ごとに大阪市や大阪府から支給されたもの、PTAで購入したものや寄付のあったものがそれぞれ保管されている。それらは通常我々教員や子どもたちが目にすることはない。今回の見学ではそれら備蓄品を実際に見たり触れたりする経験を通して、防災への意識が高まったと捉えることのできる子どもたちの感想や教員の意見が寄せられた。子どもたちは校内にそのような備蓄品があるとは知らず、災害時のニュースで見たことがあるものだと気付いて教員に伝える場面が見られた。備蓄品の見学では「もっとゆっくりと見学する時間がほしい」と子どもからも教員からも意見が寄せられ、実際に触れることのできる学習活動の重要性を確認できた。



3) 非常食を取り入れた給食の提供

当日の給食では災害用レトルト食品の購入に加え、期限の近付いたアルファ化米を大阪府から提供いただいたことで全員が食べる体験を実現できた。いつもと違った給食に子どもたちはワクワクした様子、少し戸惑った様子を見せながらも「思ったよりおいしくて驚いた」と言いながら経験を積むことができた。給食メニューの説明については栄養教諭が校内放送を行ったが、各学級の担任が自主的に説明した

り、できる子どもについては食器を使わずレトルトのパックのまま食べる体験を促したり、子どもたちの学びが充実するように展開する姿が見られた。また調理に当たった栄養教諭や調理員の方々についても、非常時の行動確認ができた。



4) 避難訓練

大阪880万人訓練については大雨警報の発令により大阪府の判断で中止となった。本校では校舎内の上の階へ避難するという津波を想定した設定であったことから雨の影響はないと判断し、校内独自の訓練として予定通り実施した。防災に関わる学習や体験の直後に避難訓練が設定されたことにより、子どもたちは災害に対する危機意識をいつもより高めた状態で訓練に参加することができた。



6 考察

これら一連の活動は子どもの発達に応じて体験的に展開されたことで、子どもたちが主体的に学習へ参加できた。本実践では避難行動について学ぶことに加え、その後の避難生活についても一人ひとりが自分なりの考えを巡らせ、学習することができつつあるのではないかと考える。子どもたちは一日の振り返りの中で自分なりの学習成果を言語化し、ワークシートにまとめたり発表したりする姿も多くみられた。高等部の生徒の中には、「また来年も防災デーをやってほしい」「1月17日や3月11日にまた防災について勉強してみてもいいかな」と言い、今回の学習を次の学びへと繋げようとする姿が見られたことも成果のひとつと言える。また教員についても取組を通して得た成果が大きいのではないかと考えられる。備蓄品の見学では教員にとっても保管場所や使用方法について知るきっかけとなったことは間違いない。更には今回防災デーを実施してみて、また独自に自身の担当する授業の中でも実施してみたいという動きが生じ、本プロジェクトの主担者に対して「授業で備蓄品を借りることができないか」「防災教育をテーマに研究授業を行いたいの、相談に乗ってほしい」という希望が集まり、発展的な学習が展開されている。これら教員の行動から、学校に関わる多くの人にとって防災教育に対する意識を高める成果があったと推察できる。また各関係機関への協力依頼を行ったことは、活動内容が充実したことはもちろん、いくの防災デーが学校単体の活動に終わるのでなく、今後は地域の取組としての位置づけをめざし、発展的・持続的に展開することへ期待が持てる結果になったと考える。